

ご案内

3月14、および15日に別紙チラシの証言集会をご案内します。

すでに戦後63年が過ぎて、戦争体験者の高齢化を押しとどめることはできません。残念ながら「最後の証言」を聞く機会は着実に近づいています。貴重な機会です。どうぞご検討ください。

1945年の終戦時に、中国にだけでも200万人をこえる日本軍兵士がいたはずです。その人たちが帰国後どこまで真実を語り、残してくれたでしょうか。侵略者としての当事者が真実を語るにはあまりにも大きな苦痛が伴うことでしょう。その苦痛ゆえ語ることもできなかつた人も少なくないでしょう。また同時に、侵略戦争の当事者としての反省に至らず、したがって真実を語ることもなかつた人も少なくないのではなでしょうか。

数は少ないが、侵略戦争に参加した自分の体験を、心からの反省に基づいて真実を語る人たちがいます。「中国帰還者連絡会」に所属していた人たちです。

敗戦と同時に60万人もの日本軍将兵が酷寒のシベリアに抑留されて、強制労働にさらされたと、その内6万人が犠牲となった事実は広く知られていません。敗戦から5年経ってもまだ数千人の将兵がシベリアに残されていた事実もあまり知られていません。しかし、その中から、誕生したばかりの中国新政権に「戦犯」として引き渡された969名の存在は、より一層知られていません。

ハバロフスクで乗った、3段棚に仕切られて身動きもできず、拷問のようなむせかえる暑さの貨車が中国との国境の町に着いた。1950年7月18日のことであった。そこからは白いカバーのかかった中国の客車に乗り換えた。到着したのは中国の撫順戦犯管理所でした。この人たちはさらにここに6年間、収容され、拘禁生活を送ることになりました。

彼らは収容された「最初の1年は遊びほうけた」といまでも言います。中国の撫順戦犯管理所での環境は、充実した設備、3度の白い米の飯、管理所職員の人道的な対応、その上強制労働もなく、有り余る自由な時間がたっぷりと与えられました。飢えと寒さと強制労働のシベリアでの体験とはあまりにも環境の違いに最初は戸惑ったそうです。だが慣れるにしたがい、収容された最初の1年間は飯粒を固めて基石をはじめ、将棋の駒や麻雀パイまで作って「遊びほうけた」そうです。

1年が経過し、やがて遊びも飽きて少しずつ考えはじめました。読み物を要求して読み、学習し、「あの戦争は正しい戦争だったのか」「誰がどのような目的で開始されたのか」などを考えはじめました。さらに目の前の管理所職員はその多くが侵略戦争時、自らが日本軍に傷つけられ、或いは自分の家族が殺された当事者であることを知り、中国への侵略戦争の中で、自ら犯してきた戦争犯罪の心からの反省に至ったのでした。じつに6年の年月を要したのです。罪を大幅に減じられてほとんどの人たちが帰国したのが1956年でした。

帰国したときは、すでに戦後11年の年月が経過していました。社会はすっかり様変わりしていました。生活すらままならぬ環境の中で彼らは、「中国帰還者連絡会」を結成したのです。最初は自分たちの生活防衛のための要求をまとめることの運動に大きな比重がおかれていました。やがて彼らは、「日中友好、反戦平和」を柱にした運動に発展させ、侵略戦争の真実を今日まで営々と語りついでこられました。自らの行為の心からの反省に基づく侵略戦争の真実の証言は、多くの人たちの胸に響いてきました。

「戦争体験の風化」が叫ばれて久しく、すでに多くの方が亡くなられ、外に出てお話しができる方もほとんどおられなくなりました。私たちの身のまわりにわずかに存在する戦争体験者も、その体験は昭和20年に入ってから東京大空襲、沖縄、広島、長崎と続く戦争末期の被害の側から語られることがほとんどです。だがその10数年も前から日本軍は侵略軍として中国へ攻め入り、中国国民への甚大な被害を与えた加害の真実を語る者は少ない。

侵略戦争を担った本人が話す、心からの反省に基づく事実の証言は、またとない貴重なお話しとなりましょう。今後も度々その機会をつくることはますます困難となりましょう。

ぜひ、一人でも多くの方に真実を聞いていただきたく、ご案内申し上げます。

2009年2月吉日

撫順の奇蹟を受け継ぐ会神奈川支部 代表 松山英司

(連絡先 046-871-4263 kan.mat.hid@tbc.t-com.ne.jp)

今回の証言者篠塚さん、絵鳩さんのプロフィールはチラシの裏面をご覧ください